様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １５ 日現在

機関番号：３０１０６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ０２２１８

研究課題名（和文）人のリジリエンスを促進するコミュニティ要因の実証研究―国際地域比較調査を通して―

研究課題名（英文）An Empirical Study of Community Factors Promoting Human Resilience: Through an International Regional Comparative Study

研究代表者
中村　和彦（NAKAMURA, Kazuhiko）

北星学園大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：２０３３０６７３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、人がリジリエンスを発揮するために必要となるコミュニティ資源のついて、実証的に明らかにすることを一大目的としている。コミュニティ・リジリエンスに関連する文献調査を精力的におこない、日本の地域福祉との関連について、また量的及び質的調査により、「困り感」を抱えた若者のリジリエンス発揮とコミュニティ資源との関係を明らかにした。また、大学生500名への調査を実施し、「リジリエンス測定尺度」の妥当性を確認することができた。
　加えて、リジリエンスの理論と思考やその具体をまとめた著作『レジリエンス研究―レジリエンス思考に基づくソーシャルワーク実践』を出版した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　レジリエンス概念や思考は、さまざまな領域・分野において紹介され、取り扱われているが、どちらかというとパーソナルなレジリエンスに焦点化されている場合多い。しかしながら本研究では、コミュニティ・レジリエンスに着目し、個と環境の交互作用の視点から、人がレジリエンスを発揮するためのコミュニティ資源のあり方を考察している点に意義があると考えられる。
　また、新しい「レジリエンス測定尺度」の妥当性を示した点、ソーシャルワーク実践におけるレジリエンス概念を広範囲から整理した点に学術的意義を見出すことができる。

研究成果の概要（英文）：　The main objective of this study is to empirically clarify the community resources that are necessary for people to demonstrate resilience. We conducted a vigorous literature review on community resilience and its relationship to community welfare in Japan, as well as quantitative and qualitative research to clarify the relationship between resilience and community resources for young people with a sense of "neediness. We also conducted a survey of 500 university students to confirm the validity of the "resilience measurement scale.
　In addition, we published a book, "Resilience Research: Social Work Practice Based on Resilience Thinking," which summarizes the theory and thinking of resilience and its specifics.

研究分野：ソーシャルワーク実践理論

キーワード：レジリエンス　リジリエンス　resilience　adversity　ソーシャルワーク　レジリエンス測定尺度　コミュニティ・レジリエンス　ユース・ソーシャルワーク

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

人が深刻な逆境や脅威に見舞われた際、その衝撃を被るものの、ポジティブな適応が生まれることがある。そのことを端的にリジリエンス（復元力）とよぶ。本研究は、「人のリジリエンスには、心理的要因以上に、コミュニティの資源が作用しているのではないか」という学術的問いを基に、人がリジリエンスを達成できるために必要なコミュニティの資源・環境について、日本および北米の複数のコミュニティにおいて、聴き取り調査による実証研究を実施することにより、生活支援に必要な資源とその供給方法を探究することにある

２．研究の目的

本研究の中心概念であるリジリエンスを簡潔に表現すれば、それは、深刻な逆境や脅威（adversity）が現れ、その衝撃を被るものの、その後にポジティブな適応が生まれることにある。本研究の一大目的は、リジリエンスの過程研究および、リジリエンスを意図的に生み出そうとする実習研究を基に、社会生態がもつリジリエンスの促進資源と供給態勢、とりわけ、人がリジリエンスを達成するために必要なコミュニティの資源や環境について、日本と北米の比較調
を通し、生活支援に必要な資源とその供給方法を探究することにある。本研究により、人がリジリエンスに至る要因の多くがコミュニティのあり様によることが判明すれば、ソーシャルワークの方向性は大きく転換することになる。

３．研究の方法

目的を達成するため３年間の研究期間を設定し、①人のリジリエンス促進に影響を与えるコミュニティ・リジリエンスの理論枠組みを精緻化し、②７つのリジリエンス資源を基盤にしたリジリエンス促進要因把握のための調査項目の検討をおこない、③2018 年に大震災に見舞われた北海道胆振東部地域および、地震等の被害も多い中、ソーシャルワーク支援においてコミュニティ資源の充実が評価されている釧路市、浦河町において調査項目即し聴き取りによる実態調査をおこなうことを計画した。

しかしながら研究期間がコロナウイルス感染下となり方法の大幅な変更を余儀なくされ、コミュニティ・リジリエンスに関連する文献調査を精力的に実施するとともに、「困り感」を抱えた若者のリジリエンス発揮とコミュニティ資源の関係に焦点化し、若者と支援者を対象としたインタビュー調査を実施した。

４．研究成果

コミュニティ・リジリエンス概念と日本の地域福祉との関連について整理をすることができた。また「困り感」を抱えた若者のリジリエンス発揮とコミュニティ資源の関係に焦点化した若者と支援者を対象としたインタビュー調査等から、その関係について整理することができた。さらに、リジリエンスを測定する尺度（日本で初めて使用した尺度）を用いた量的調査を、選考の異なる大学生 500 名超に実施し、リジリエンスを把握する尺度の妥当性について確認することができたとともに、若者のリジリエンスを構成する因子を二つ（「自分にとっての支え」、「他者や周囲とのポジティブな関係」）確認することができた（次頁に、実際の測定尺度と因子分析の結果を添付した）。加えて、本研究の集大成として、リジリエンスの理論と思考やその具体をまとめた著作『レジリエンス研究―レジリエンス思考に基づくソーシャルワーク実践』を出版（福村出版）した。

成人用レジリエンス尺度（ARM-R）日本語版

以下の記述は、あなたに、どの程度あてはまるかお答え下さい。

あてはまる番号ひとつに、○をつけて下さい。正解や不正解はありません。

	まったく あてはまらない	あまり あてはまらない	どちらともいえない	やや あてはまる	非常に あてはまる
(1) 私は、周りの人とうまくやっていける	1	2	3	4	5
(2) 資格を取得したり、スキルを向上させたりすることは、自分にとって重要である	1	2	3	4	5
(3) 職場、家庭、その他の公共の場など、さまざまな社会的状況の中で、どのように振る舞えばよいか知っている	1	2	3	4	5
(4) 家族は自分を支えてくれる	1	2	3	4	5
(5) 家族は私のことをよく知っている（たとえば、友人は誰か、何をするのが好きかなど）	1	2	3	4	5
(6) お腹が空いた時は、たいてい十分な食べ物を手に入れることができる	1	2	3	4	5
(7) 人（他者）は、私と一緒に時間を過ごすのが好きだ	1	2	3	4	5
(8) 悲しいときや心配なときなど、自分の気持ちを家族やパートナーに話している	1	2	3	4	5
(9) 友だちに支えられていると感じる	1	2	3	4	5
(10) 自分はコミュニティ（地域社会）に所属していると感じている	1	2	3	4	5
(11) 私の家族やパートナーは、私が病気やトラブルに見舞われているときなど、つらいときに、私を支えてくれる	1	2	3	4	5
(12) 私の友人は、私が病気やトラブルに見舞われているときなど、つらいときに、私を気づかってくれる	1	2	3	4	5
(13) 私はコミュニティ（地域社会）の中で、公平に扱われている	1	2	3	4	5
(14) 自分が責任を持って行動できる人間であることを、人（他者）に示す場面や機会がある	1	2	3	4	5
(15) 家族やパートナーと一緒にいるときは安心できる	1	2	3	4	5
(16) 生活の中で自分の能力を発揮する機会がある（技術を使う、仕事をする、人の世話をするなど）	1	2	3	4	5
(17) 自分の家族やパートナーが持っている文化や生活様式、家族が何かを祝う方法が好きである（お盆やお正月、記念日や祝祭日の過ごし方、その他の生活様式や文化について学ぶなど）	1	2	3	4	5

注）オリジナル版は、https://cyrm.resilienceresearch.org/ から入手可能である。

ARM-R の因子分析の結果

因子と項目	因子 I	因子 II
因子I ： 自分にとっての支え （α=.92）		
(11)私の家族やパートナーは、私が病気やトラブルに見舞われているときなど、つらいときに、私を支えてくれる	**0.863**	0.281
(4)家族は自分を支えてくれる	**0.835**	0.185
(15)家族やパートナーと一緒にいるときは安心できる	**0.767**	0.332
(6)お腹が空いた時は、たいてい十分な食べ物を手に入れることができる	**0.645**	0.293
(5)家族は私のことをよく知っている(たとえば、友人は誰か、何をするのが好きかなど)	**0.638**	0.309
(12)私の友人は、私が病気やトラブルに見舞われているときなど、つらいときに、私を気づかってくれる	**0.636**	0.450
(17)自分の家族やパートナーが持っている文化や生活様式、家族が何かを祝う方法が好きである(お盆やお正月、記念日や祝祭日の過ごし方、その他の生活様式や文化について学ぶなど)	**0.621**	0.399
(9)友だちに支えられていると感じる	**0.602**	0.472
(2)資格を取得したり、スキルを向上させたりすることは、自分にとって重要である	**0.457**	0.331
因子II ： 他者や周囲とのポジティブな関係 （α=.86）		
(14)自分が責任を持って行動できる人間であることを、人(他者)に示す場面や機会がある	0.171	**0.651**
(10)自分はコミュニティ(地域社会)に所属していると感じている	0.338	**0.649**
(7)人(他者)は、私と一緒に時間を過ごすのが好きだ	0.308	**0.637**
(16)生活の中で自分の能力を発揮する機会がある(技術を使う、仕事をする、人の世話をするなど)	0.207	**0.634**
(1)私は、周りの人とうまくやっていける	0.271	**0.623**
(13)私はコミュニティ(地域社会)の中で、公平に扱われている	0.492	**0.609**
(3)職場、家庭、その他の公共の場など、さまざまな社会的状況の中で、どのように振る舞えばよいか知っている	0.285	**0.533**
(8)悲しいときや心配なときなど、自分の気持ちを家族やパートナーに話している	0.400	**0.444**
因子間相関	I ―	
	II 0.65	

注) 分析にあたっては、バリマックス・ローテーションを用いた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 中村和彦	４．巻 61
２．論文標題 「成人用レジリエンス尺度（ARM-R）日本語版」の妥当性とレジリエンス構成因子の検討―大学生291名への調査結果を基にして―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 北星論集	６．最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 中村和彦	４．巻 第60号
２．論文標題 「成人のレジリエンス尺度（ARM-R）日本語版」の作成と若者にレジリエンスを構成する因子の基礎的分析	５．発行年 2023年
３．雑誌名 北星論集	６．最初と最後の頁 39‐50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 秋山薊二	４．巻 50
２．論文標題 コミュニティ・レジリエンスと地域福祉―レジリエンスがもたらす生態、資源、資本を基盤にした地域福祉に向けて	５．発行年 2022年
３．雑誌名 地域福祉研究	６．最初と最後の頁 113－121
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 中村和彦・大友秀治ほか	４．巻 -
２．論文標題 リジリエンス思考によるユースワークの展開を目指して―若者の居場所づくりとコミュニティ参加支援に向けた基礎的調査研究	５．発行年 2022年
３．雑誌名 北海道の福祉	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中村和彦	4．巻 第58号
2．論文標題 松井二郎によるソーシャルワーク論を思い起こす―システム理論・リジリエンス思考・構造‐批判モデルに引き寄せて	5．発行年 2021年
3．雑誌名 北星学園大学社会福祉学部北星論集	6．最初と最後の頁 121-132
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 マイケル・ウンガー／秋山薊二・中村和彦訳	4．巻 45(3)
2．論文標題 子どもや若者のリジリエンスに関連する要素と過程	5．発行年 2019年
3．雑誌名 ソーシャルワーク研究	6．最初と最後の頁 236-246
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 片岡徹・中村和彦・牧田浩一	4．巻 57(2)
2．論文標題 紛争解決研究の新機軸に関する学際的研究―コミュニティ・リジリエンスに着目して	5．発行年 2020年
3．雑誌名 北星論集	6．最初と最後の頁 37-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中村和彦	4．巻 57
2．論文標題 ソーシャルワーク実践理論の整備に向けたスケッチ―実践モデル・アプローチ・支援スキルの現在	5．発行年 2020年
3．雑誌名 北星論集	6．最初と最後の頁 163-181
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 米田龍大・中村和彦・志度晃一・大友芳恵	４．巻 40
２．論文標題 いじめ被害経験を有する学生のリジリエンス資源	５．発行年 2020年
３．雑誌名 北海道社会福祉研究	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 KATAOKA,Toru & NAKAMURA,Kazuhiko
２．発表標題 Reconsidering Community Resilience for Educational Restoration based on confidence-building
３．学会等名 The 23rd International Conference on Education Research（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 中村和彦・米田龍大
２．発表標題 レジリエンス（再起・新生力）とエンパシー（共感力）との関連性―大学生への調査結果による検討―
３．学会等名 日本精神保健福祉学会第11回全国学術集会
４．発表年 2023年

１．発表者名 朝岡健吾・中村和彦
２．発表標題 子どもと青少年のリジリエンス尺度修正版（日本語版）の信頼性と妥当性の検討
３．学会等名 北海道社会福祉学会２０２１年度研究大会・シンポジウム
４．発表年 2021年

〔図書〕　計2件

1．著者名 秋山薊二：著、中村和彦：編	4．発行年 2023年
2．出版社 福村出版	5．総ページ数 299
3．書名 レジリエンス研究―レジリエンス思考に基づくソーシャルワーク実践	

1．著者名 鈴木孝典、鈴木裕介、中村和彦ほか	4．発行年 2023年
2．出版社 中央法規出版	5．総ページ数 199
3．書名 図解でわかるソーシャルワーク	

〔産業財産権〕

〔その他〕

レジリエンス研究情報センター
http://www.ipc.hokusei.ac.jp/~z00749/index.html

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	秋山　薊二 (AKIYAMA Keiji) (50133575)	関東学院大学・社会学部・名誉教授 (32704)	

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
カナダ	Resilience Research Centre			